# 彙　報

## ◇展示

○令和四年五月一六日～六月一〇日
　春季展示「くずし字って何？」
○令和四年一〇月一一日～一一月一一日
　企画展
　　彦根高商創立百周年記念「１００年に向かう学知と人材育成」
　企画展関連講演会（一〇月二二日）
　　「高商歴史―その研究と史料」　　当館館長　阿部安成

## 開催の記録

今年度の企画展示は、通常通り展示室での公開としたが、依然新型コロナウィルス感染症の流行が継続しているため、マスクの着用・消毒・検温等の基本的な感染防止対策をお願いし、展示室入室人数を十人までに制限しての開催となった。

昨年度の春季展示に引き続き、主に本学学生に対して、附属史料館とはどのような施設でどのような仕事を行っているのかに興味をもってもらう意図で企画を進めた。そこで今回は、当館の主たる業務内容である史料目録作成の基礎作業、古文書を読むということに焦点を当てて、「くずし字って何？」と題して、くずし字についての入門編序章というような位置づけの展示とした。まず、彦根市内で見かけるくずし字が書かれた看板を紹介し、現代でも身近に使われている字であることを実感してもらった。その後江戸時代の史料中にも同じ文字が見られることを確認し、くずし文字が過去の遺物ではなく現代に連なるものと認識してもらうことができた。次に書き順と部首からくずし字を読むヒントを示したり、マグネットボードを使って異体字という通常の漢字とは異なる形の字を部首の組み合わせ方から推測する体験ができるような工夫もしつつ、パネルで図解した。今回は３年ぶりに新入生の入門セミナーでの見学を受け入れ展示解説をしたところ、街中の看板や部首の組み合わせのところでは積極的に考える学生もみられ、手ごたえを感じる展示となった。また、この展示タイトルに呼応するように、古文書を所有する一般の方々が古文書をもって、あるいはその写真を持参して来館され、内容を読んでほしいという要望が相次いだ。このように一定の効果はあったと考えられるので、今後も継続してくずし字読解についての展示を開催していきたい。（観覧者数三九一名）

秋の企画展は、今年が本学部の前身である彦根高等商業学校設置百周年にあたることを記念して、「１００年に向かう学知と人材育成」と題して、「経済学部大学史資料」や研究所の雑誌類、卒業アルバム等の写真から展示を構成した。高等商業教育の世界的な始まりから、それより少し遅れて日本国内に設置された各高等商業学校の紹介や、当時の商業教育を担当された先生方の著作物、人材の輩出等について、また今年度耐震改修工事が完了した陵水会館についても展示した。学生の講義での団体見学はなかったものの、個別に興味をもって観覧してくれる学生も多くみられた。観覧者数は二一九名であった。本学部の創立百周年記念行事が令和五年度に開催されるため、次年度の春季展示も一部展示替えをして、同じタイトルで開催する予定である。

またその関連講演会を、これも耐震改修工事によってリニューアルした講堂で、三年ぶりに対面で実施した。聴講者数は一二名であった。

**◇「菅浦文書」の再調査**

今年度も科学研究費助成研究「中近世「菅浦文書」の公開促進と史料学的・文理融合的研究」（基盤A、令和三～七年度）により、本学および滋賀県立大学・琵琶湖博物館・東京大学史料編纂所に在籍する研究者らとともに、「菅浦文書」に関する共同研究会をオンラインで三回開催した。研究会では『菅浦文書集成（仮）』に収録する文書のデジタル画像を用いて、最新の研究成果をふまえながら史料翻刻文の校訂を行った。デジタル画像で判読できない文字等については、原本閲覧によるチェック作業を研究会とは別に二回実施した。国宝「菅浦文書」と「菅浦家文書」（中世分）の校訂は既に終了しており、今年度は滋賀県長浜市西浅井町菅浦に伝存する史料など関連史資料の校訂を行い、完了させることができた。

また『菅浦文書集成（仮）』の刊行に向けて入稿用原稿の作成に入り、約六〇〇点の翻刻文を出版社へ入稿した。

さらに、昨年度に引き続き、東京大学史料編纂所との共同研究として国宝「菅浦文書」の料紙調査を実施した。昨年度同様、料紙の測定及びマイクロスコープでの画像分析等に加え、筆跡鑑定や「菅浦与大浦下庄堺絵図」の顔料分析も行われた。今後これらの調査結果の取りまとめと公表をいかに行っていくべきか、検討が必要な段階に入ったと言い得る。現時点では、来年度も共同研究を継続したいと考えている。

また研究分担者である本学データサイエンス学系の佐藤健一教授による、「菅浦文書」の花押・略押の画像データ解析を実験的に開始した。類似した形態の花押を高精度で検索することが可能になれば、本研究会はもとより中世史料研究全体にとってもきわめて有益であり、今後も協議を重ねていきたい。

**◇学長裁量経費による史料館リーフレットの多言語化及び当館収蔵史料目録検索システムの更新作業**

昨年度史料館リーフレットの多言語化の第一弾として英語版作成を実施した。その継続で今年度は、韓国語版と中国語版（簡体字・繁体字）を作成した。単なる翻訳ではなく、その母国語を用いる方々が読んで理解できる内容を目指して、歴史的用語等には必要に応じて日本語表記をそのまま残して説明を加筆するなど、工夫を加えた。

また、平成三十年からHP上で運用している収蔵史料目録検索システムのサーバ環境更新作業が必要となったため、十月にOS等の更新作業を行った。稼働中止は一日のみで完了した。今後の運用についても更新作業等の維持費がかかる見込みであるため、予算のかからない他の手段を検討はしたが、本学の方針等も踏まえた上で検討を継続し、当面は更新作業の予算確保に尽力し運用を継続していきたい。

**◇（一財）伊藤忠兵衛基金からの助成金による伊藤孝三氏撮影フィルムの修復及びデジタル化作業**

豊郷町伊藤長兵衛家の子孫故伊藤孝三氏が昭和初期に撮影された十六ミリまたは八ミリフィルム六十七巻が平成二十八年度に寄贈され

ている。これらは以前から劣化が相当進行していて酢酸臭がひどく、懸念していた。そこで、一般財団法人伊藤忠兵衛基金から毎年助成いただいている文化厚生事業助成金を充当し、今年度は二回に分けて計三十六巻分を修復し、その画像をデジタルデータ化することにした。伊藤氏の私的な画像も含まれるが、伊藤家の園遊会や丸紅の運動会、海外への視察旅行の様子など、当時の貴重な画像がよみがえった。次年度もこの事業を継続し、全巻の修復・デジタル化を目指す予定である。

**◇史料整理**

吉田氏史料（油屋藤兵衛家文書　日野町）三六点・柴谷家文書追加分（彦根市）六点

**◇発行**

ＳＡＭにゅうす五六号、五七号

『彦根高商創立百周年記念１００年に向かう学知と人材育成』（令和四年度企画展図録）

**◇学部内雑誌掲載日本史論文**

『彦根論叢』第四三一号

「大正期国有林下戻地の鈴木商店系拓殖企業の興亡と初期・終期に蠢動する特異企業家　秋田県生保内原生林を巡る平尾幸太郎・太田雪松らの役割」小川功

同

「新・琵琶湖疏水成立史（１）」筒井正夫

『彦根論叢』第四三二号

「新・琵琶湖疏水成立史（２）明治十六年十月十一日～十二月、滋賀県令籠手田安定の建議提出から京都府の疏水起工伺が却下されるまで」筒井正夫

『彦根論叢』第四三三号

「新・琵琶湖疏水成立史（３）明治十七年一月、内務省への管轄移行から二十三年四月、疏水竣功まで」筒井正夫

『彦根論叢』第四三五号

「鈴木商店専用軌道の軽鉄化妄想と西之下谷〝村民ノ紛擾〟無許可〝実験線〟トリックが崇った大正期但馬軽便鉄道〝ビッグストア〟仮説」小川功

『滋賀大学経済学部研究年報』第二九号

「清酒製造業における革新Ⅱ ―南都諸白から丹醸そして灘酒に至るイノベーションの史的考察―」小野善生

同

「彦根高等女学校で利用された『體育簿』に関する一考察」榎本雅之

**◇運営委員**

須永知彦　渡邉凡夫　石井利江子　山下悠　坂野鉄也　松田有加里

**◇史料館職員**

館長　阿部安成

専任教員　青柳周一

学芸員　南田孝子　吉岡恵

非常勤職員　岸妙子　松崎由貴代

◇**客員研究員**

水野章二　宇佐美英機　大島久幸　谷ヶ城秀吉　深見泰孝　薄井彰